

Rio

豊田市矢作川研究所 月報

- ◆ 豊田の養鯉産業と文化の盛衰
- ◆ 矢作川の水のいま・むかし
ー 矢作川流域下水道の普及ー
- ◆ 水路に魚たちが戻ってきた！
～水路改修に伴う魚類生息環境の復元～
- ◆ 第1回「矢作川感謝祭」開催のお知らせ



9

2014
No. 189

豊田市矢作川研究所 〒471-0025 愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F

TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028 e-mail yahagi@yahoo.com URL <http://yahagigawa.jp>

豊田の養鯉産業と文化の盛衰

高木秀和

ニシキゴイ、といえば、御殿の庭につくられた池を優雅に泳ぐ「宝石」を思い出すだろうか。あるいは、富裕層の台頭を背景に、世界へ日本のニシキゴイが輸出されていることをご存知の方もいるかもしれない。いずれにしても、ニシキゴイと聞くと、縁日の屋台などで売られている金魚とは異なり、高貴なイメージを持つのは私だけではないと思う。しかし、実際のところは、ホームセンターなどで廉価のニシキゴイも売られているし、愛知県の天然記念物に指定されている「四尾の地金」のように、手塩にかけて育てられる金魚もいる。観賞魚を飼育するには手間とお金がかかるが、愛好家たちはそれらを厭わない。

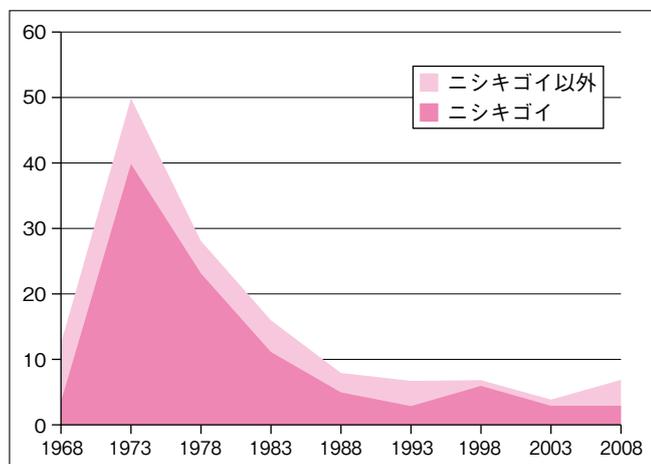
ところで、豊田市域でもニシキゴイ養殖が盛んだったことは、あまり知られていない。長年この地域にお住まいの方なら、遠い記憶を辿ると思い出されるかもしれない。現在からすると、豊田とニシキゴイは結びつきがたいもの

である。

水産業を知るための基礎資料である『漁業センサス』（西暦の下一桁が3と8の年に調査を実施）などをもとに、旧豊田市域のニシキゴイ養殖経営体数の推移を確認すると、一時的にそれが急増したことが分かる（下図参照）。統計上ピークを記録した1973年には40経営体がニシキゴイ養殖を営んでいたが、『豊田市の農林業』（東海農政局豊田統計情報出張所、1982年）から数値を補うと、74年32経営体、78年23経営体、80年14経営体となり、急激に減少したことがうかがえる。平成の大合併を経た2008年時点では豊田市全体で3経営体を数えるのみとなり、現在の豊田とニシキゴイが結びつかないのも無理からぬことである。なお、稲武でも少数の経営体がニシキゴイを養殖してきた。

では、いかにしてこの「ニシキゴイバブル」と称すべき現象が70年代前半にみられたのだろうか。その理由を、養鯉業者の方に伺ってみた。お話の要点をまとめてみると、①水稲農家が副業として参入したこと、②旧三好町で60年代にニシキゴイ専門店を開業した先駆者（Aさん）が存在したこと、③愛好家としてAさんのもとへ通っていたBさんが豊田で養殖業を始め、さらにBさんのもとへ愛好家として通っていたCさんが同じく豊田で開業したこと、④高度経済成長期を経た日本では、庭（池）付き戸建住宅を建てるのが「人生設計の夢」だったこと。と、世代交代したご主人が、丁寧に教えてくださいました。

また、「ニシキゴイバブル」を知る方によると、豊田市南部に近い岡崎市のある地区は、ニシキゴイを出荷する人もいたが、飼っている人同士でニシキゴイ（の姿かたち）を競い合う土地柄だったという。



内水面漁業経営体数の推移（旧豊田市域）（単位：経営体）
資料：『漁業センサス』により作成。



料亭の日本庭園を優雅に泳ぐニシキゴイ

このように、「稲作からの転換」や「水田利用再編対策」というスローガンが叫ばれたところに、水稻農家たちが趣味と実益（副業）を兼ねてニシキゴイ養殖を始めたが、乏しい養殖ノウハウや相次いで開業するライバルの存在に負け、養鯉業から撤退したというのが「ニシキゴイバブル」とその崩壊のシナリオである。住宅事情も、戸建住宅からマンション志向に変わりつつあった。需給双方でニシキゴイというロマンを追いかけたが、泳ぐ宝石を磨き続けるのは生産者、消費者ともに困難なことだったのである。

（たかぎ ひでかず、愛知大学大学院）

矢作川の水のいま・むかし — 矢作川流域下水道の普及 —

白金晶子

矢作川についての質問で必ずと言ってよいほど聞かれるのが「矢作川の水はきれいな？昔に比べてどうなの？」というものです。確かに気になりますよね。図1が豊田市街地を流れる矢作川の水質変化を示したものです。1952年に比べるとリンは1970年代にかけて、窒素は1990年代まで急激に上昇し、水質は悪化しましたが、近年、減少傾向に転じています。矢作川の水はなぜきれいになってきたのでしょうか？

矢作川流域では1972年から矢作川本川沿いに矢作川流域下水道の整備が始まりました。豊田市は流域下水道の最上流部に位置するため、汚水の幹線が到達するまでに長い年月がかかりました。このため豊田市街地の汚水を処理する豊田終末処理場が1988年から供用を開始し、その処理水は市街地を流れる安永川、そして矢作川へ放

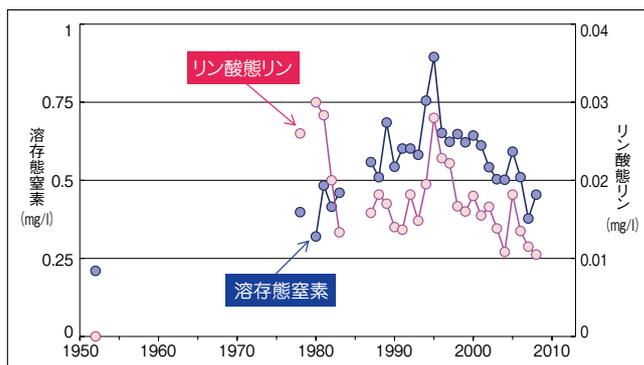


図1 豊田市街地を流れる矢作川の水質変化

流されていました。

矢作川流域下水道は着手から20年、1992年に最下流の西尾市で供用を開始しました。豊田市では1997年から供用が始まり、順次、流域下水道へ接続されたため、豊田終末処理場は2008年に廃止されました。現在は4市1町の66万人余りが使った後の汚水が、矢作川流域下水道に流入し、矢作川河口に建設された矢作川浄化センターで処理され、直接、三河湾へ放流されています（写真）。

豊田市街地の矢作川の水質は流域下水道の供用が開始され、接続率が年々増加したことで、水質が改善（図1の窒素、リンの低下）されてきたことが伺えます。かつては豊田終末処理場を始め、市内各地の下水処理場で汚水が処理され、矢作川の支流を経て本流に流入していました。現在はその汚水の多くが流域下水道へ流入し、矢作川河口で高度に処理されて海へ注がれることで、矢作川の水質は向上しました。

矢作川流域下水道で処理される下水の量は1992年



矢作川浄化センターから三河湾へ放流されている処理水

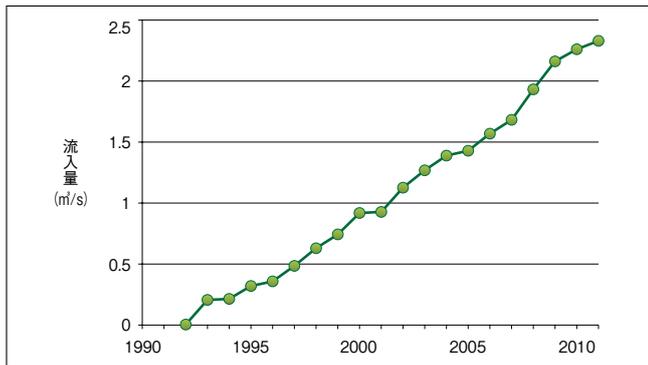


図2 矢作川流域下水道への流入量

に供用を開始して以降、飛躍的に増えています(図2)。2009年の処理水は1秒あたり2.2m³でした。矢作川の河口から約10km上流に位置する米津橋付近(西尾市)を流れる矢作川の流量(図3)と比較すると、その5%程に相当します。米津橋付近の流量は1960年代に大きく減少していますが、近年、流域下水道の普及でその減少に拍車

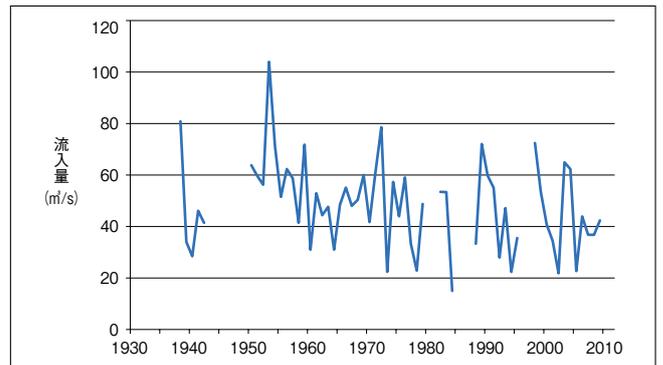


図3 矢作川下流(米津橋付近、河口から約10km)の流量

がかかっているようです。流域下水道は市町村の垣根を超えて広域的に処理することで、施設の建設費や維持費が軽減されるなどのメリットがある反面、水が川に戻らないというデメリットにも着目する必要があります。

(しらがね あきこ、豊田市矢作川研究所研究員)

水路に魚たちが戻ってきた！ ～水路改修に伴う魚類生息環境の復元～

山本大輔

「大きな魚が捕れた!」「オタマジャクシがいっぱい!」夏休みも間近に迫ったある日、豊田市街地にほど近いこの場所で、1年半ぶりに子どもたちの元気な声が響きました。ここは、豊田スタジアムに近接する水田地帯にある排水路で、いわゆる三面張りのコンクリート水路です。もともとは農業用排水路ですが、区画整理事業に伴う排水路としての機能を持たせるために、水路の拡幅と堆積土砂の浚渫による改修工事が行われました。

以前のRio (No.180)でお伝えしたように、この水路は工事前の時点(図1)で、部分的に土砂が堆積し、そこに

植物が繁茂することで、コンクリート水路の中に“川のような”蛇行した流れと水深の変化が生まれており、豊田市内では生息数が減少しているとされるタモロコを始め、ドジョウなどの魚たちが豊富に生息していました。そのため、工事にあたっては関係者との調整を行い、土砂を全て取り除くのではなく部分的に残す方法を採用することにより、工事後の水路内の環境を工事前の状態に近づけるよう工夫しました。また、工事に先立って生き物を避難させる「お魚救出大作戦」が寺部小学校の児童により行われました。



図1 改修工事前の水路



図2 改修工事後の水路での生き物調査



図3 生き物調査をする児童

改修工事の後、コイ科の魚の多くが産卵期を迎える春を2回過ぎた今年7月15日、「戻ってきたかな？魚たち生き物調査大作戦」と題して再び寺部小学校の児童による調査が行われました(図2)。調査当日は好天に恵まれ、児童たちが足早に水路に入っていくと、たちまちにあちこちで歓声が上がります。熱中症など暑さ対策のため採集する時間は短いものでしたが、児童たちは熱心に生き物を探してくれました(図3)。調査が終わると、数えきれないほどたくさんの魚たちが集まっており、数百匹はいたと思われます。この調査の結果、タモロコ、ドジョウ、モツ



図4 戻ってきた魚たち

ゴなど工事前に見られた魚のほとんどが採集されたため、魚たちが無事に戻ってきたことを確認できました(図4)。

こうした工事というのは私たちの生活に必要なから行われるものですから、それに伴う環境の変化は避けられないのかもしれませんが。今回の事例でも、水域と陸域の両方を生活の場とするような生物には影響を残している可能性があります。水路内を工事前の環境に近づける工夫をするだけでも、魚たちは自然と戻ってきてくれることを実感しました。

(やまもと だいすけ、豊田市矢作川研究所研究員)

▶ 第1回「矢作川感謝祭」開催のお知らせ

矢作川には、鮎や鰻などの回遊魚をはじめ、いろいろな生き物たちが生活しています。私たちも矢作川の水を飲み水や工業・農業用水として利用し、その恩恵を受けて生活しています。矢作川の恵みに感謝し、矢作川の実力と魅力を知ってもらうため、これまで別々に開催していた「矢作川天然鮎感謝祭」と「矢作川さかな釣り大会」を今年は「矢作川感謝祭」として同時開催します。

はたして矢作川ではどんな魚が釣れるのか？ また、毎年恒例となった、鮎釣り師が矢作川で釣った鮎の塩焼きはもちろん、さかな釣り大会で釣れた魚が食べられるかも？ 他にも楽しい新イベントが行われる予定ですので、奮ってご参加ください。

日 時：平成26年10月4日(土) 午前11時～(受付開始：10時30分)

(悪天または増水時は26年10月25日(土)に延期)

場 所：豊田大橋東側の河川敷

主 催：矢作川感謝祭実行委員会

※詳細については、内容が決まりしだい矢作川研究所ホームページ等でお知らせします。



第1回矢作川さかな釣り大会(釣り教室風景)



第5回矢作川天然鮎感謝祭(クイズ大会風景)



後記

豪雨による土砂崩れや浸水などの大規模な災害が例年になく多い夏でした。被害に遭われた方には心よりお見舞い申し上げます。人口増加や治水対策が進み、以前は人の住まなかった場所に建造物が建てられるようになって、豪雨時の被害が拡大したことが指摘されています。近年集中豪雨が増加しているため、身近な地域のハザードマップを見て災害からわが身を守る必要が、より一層高まっていると痛感しました。(洲)